



一鬼夜行



千職丈二

*

深々とした夜のことだった。

予定外だった予定が入ってしまったんで、帰る時間が遅くなってしまった。

時刻は午後の十時を過ぎたところだ。

最寄り駅で電車を降りた。商店街が見える。今は寂れていて、この時間に人通りはほとんどないはずだ。

でも、今日は違った。

同じ高校の制服を着た女子高生が一人で歩いていた。

「あいつか……」

一目でわかった。幼馴染だ。

彼女は裏路地へと入っていった。

「なんでだ！」

その行動を見て、彼女のところへと急いだ。

鞆をしっかりと持って、全力疾走した。

「っ——、しょうがないよな」

静かなことも相まって、その裏路地へ続く道は危うい印象を与えた。

まるで心臓が跳ねているかのような感覚だ。

鼓動は高鳴っている。

手に汗を握る。これは間違いなく冷や汗だ。

裏路地に着いた。

これはもう完全に空気やら雰囲気だとか直感とかシックスセンスみたいな、なんて言うか、こう、曖昧なものを完膚なきまでに超えている。

恐怖を具現化したかの様だった。

彼を知ろうとしてもわからないだろうしわかったところで理解できないだろう。それにしても、情報が少なすぎてどうしようもない。

——ああ、でも、間違いはないんだ。

「凶器はナイフで、中肉中背の少年……か……」

鞆をゆっくりと置く。

この一言で、二人の注意を俺に向けることに成功した。

成功した、と言えるんだらうか。

噂の殺人鬼が話しかけてきた。

「おや？ お前ってもしかして怖いもの知らずってやつか？ それともただの馬鹿なのか？ こんなケースは今回が初めてだぜ。女の子だけで満足出来ただろうけれど、見つけちゃったからには殺すしかないなあ……」

彼は予想に反していた。あれだけの人間を殺せる人間はもっと狂気に満ちていて、理性の欠片もないものだと思っていたというのに――

「それにしても、うーん、君はあんまり好みじゃないなあ。もうちょっと好みだったら殺すまではいかなかったかもしれないけれど、俺のボーダーラインは高いんでねえ」

その挙動は自然で、異常なまでに普通だった。

右手には月光を浴びて輝いているナイフが揺れている。

「あんまりジロジロ見ないでくれるかな？」

でも、その瞳は俺の勇気とかそんなようなものを殺すには十分だった。

まるで脊髄を冷水に浸けているような感覚だ。

こいつの恐怖で震える背中が見えていなければ、とっくに逃げ出していただろう。

「なっ……冗談だよな……？ 本当に……？ 嘘だよな……？」

その泣きそうな声を聞いて、殺人鬼はくつつ、と皮肉な笑みを浮かべる。

「これだから最近の子どもは駄目だ。現実と自分の世界の境界線を明確に引けちゃいない。本当にあり得ないことが起こるか？ あり得るから起きるんだぜ」

無意識の行動なんだろう。彼女は俺に背を向けたままゆっくりと後退し、俺の右側にある壁を背にした。

気づかなければ良いものに、気づいてしまったと思った。

街灯のない裏路地の、僅かな空間に落ちた幻想的、かつ冷たい月明かりに照らされて、彼女の横顔が見えた。

彼女の表情は明らかに強張っており、唇は震え、瞳からは涙が零れ落ちそうだ。

それでも感じた。

そこに死にたくないという意思を。生きていたいという意思を。負けたくないという意思を。戦おうとするその意思を。その、真っ直ぐな瞳から――

何よりも美しかった。壊れてしまいそうな雰囲気や仕草じゃない。その覚悟を決めた瞳が――脊髄を冷水に浸けたからだろうか。頭は酷く静かで落ち着いている。

殺人鬼、言っていることが抽象的な上に観念的でよくわからないけれど、こいつが言っていることはそういう意味じゃない。

こういう状況に慣れている訳がないんだけど、

――どうするべきなのか、次から次へと浮かんで来る。

「そういうことじゃなくて、信じたくないってことだろう？」

「かはは、揚げ足を取り合っても、しょうがないだろ」

一息の間もなく、殺人鬼は返答し、続けた。

「さあ、綺麗な声で鳴いてくれ……」

やつの表情がはっきりと殺意を示した。狙いは完全に俺だった。

*

驚いたのは初動の速さ。

何のためらいもなく放たれるその一閃は、俺も理解しきってない俺の急所を狙ってくる。

しかしその一閃は芸術的に鮮やかで呆れる程にしなやかで、真っ直ぐなものだった。

ナイフが顔、いや喉をかすめる。

狭い路地で出来るだけ大きく避けながら、勝利の方法を模索する。

「お前、速いな」

「お褒めの言葉をどうも！」

余裕を見せる為の返答だったが、もしかしたら逆効果だったかもしれない。息は完全に乱れていた。

「赤子の手を捻るように軽く殺せるかと思ったら、駆け引きと騙しあいがお望みかよ。それだけならもしかしたら、俺に勝てたかもしれないのにな。可哀想に。フィールドが殺し合いじゃあ、お前の勝機は皆無だぜ」

確かに、わざわざそんなヒントを出すヤツに、俺が騙しあいで負けるはずがない。

本気を出したヤツの機動は複雑になり、軌道は不規則と化した。

上半身と下半身が別の動きをし、左右に揺れ、間合いを取り、詰める。

ああーそれでも、まだ見える。

まだヤツの動きを予測し、回避することが出来る。ヤツの動きの設計図を急遽、組み立てる。未来はまだ、見えている。

「おいおい、それだけのポテンシャルが合って、良くそんな生き方をしてるぜ。もっとうる人並み外れた道を、選べるかもしれないっていうのに」

だから、なんだと言うのか。

俺は俺として、俺だから俺であり、俺は俺のように俺をする。

「でもそうでなきゃ、こんなところでこんな事してないか」

殺人鬼はギアをさらに上げた。信じられない素早さを隠していたことを、体で教えてくれた。あり得ない。囷として放たれた一撃が、左腕に入る。

「がっー」

痛い。痛い。痛い。イタイ。イタイ。いたい。いたい。いたいイタイ痛い痛いいたい痛いー

痛みでー思考がー途切れそー

*

悲鳴が上がる。

「きゃああああー」

無駄な感覚は完全に死に絶え、理性が普段より増して君臨する。

彼女が悲鳴を上げたのは襲われたという訳じゃない。俺の左腕の関節、肘辺りから滴る血を見たからだ。

彼女と目が合った。

「大丈夫ー？」

その綺麗な瞳から大きな涙がこぼれ落ちた。

泣いている。彼女を泣かせてしまっている。彼女を泣かせているのは誰だ？ それは俺とー
殺人鬼の目は新しい玩具を見つけた子どものそれだった。

「良い目をしているな。まだ楽しめそうだ」

なんでも良い。勝てないなら、勝てるように考えろ。勝てるものを考えろ。勝てるものを見つけろ。

相手はナイフだ。右手にナイフを逆手持ちしている。

咄嗟に路地の入り口に置いた鞆は遠い。

彼女の鞆に、はみ出した鏡があるー

一度目は上手くいくはずだ。やつはまだ俺の攻撃を体験していない。

右ストレートのフェイントの後、服を掴み、無理矢理投げる。

体格は五分だ。けれど、全身全霊、渾身の先制が失敗するはずがない。

「ちっ……力はあるんだな」

殺人鬼は無様に倒れ、背中を打った。

「鏡を貸してくれ！」

「は、はい！」

殺人鬼はそれを聞いて立ち上がる。

鏡を手にとって振り向くと、そこにはー

攻撃に転じている殺人鬼の姿がー

まずい。何がまずいかっていうと死ぬのがまずい。死ぬのはもちろんまずいんだけど、それ以上にー彼女を守ることが出来なくなることがー

*

――あれ？

俺は――俺は一体、何の為に？

どうして――

どうして、俺は戦っているんだっけ？

死にたくない。

そりゃ、もちろん死にたくない。何よりもまず死にたくない。

でも――

そういうことじゃないんだ。

君が俺を庇ったら、もう何もかもが滅茶苦茶になってしまうじゃないか。

――馬鹿野郎。弱いくせに意地張りやがって。

思ったとおりだ。脚だって震えているじゃないか。

*

俺の世界の時間は正常に戻った。

左肩にブラックホールが開いたのかと錯覚する程の痛みがある。俺を庇った彼女を庇った傷だ

。

もう一撃入れば、もう少し下の右下の肋骨の裏から心臓を一突きすれば、確実に天国やら地獄やら、……まあ、地獄だろう。そんなところへ旅立つことが出来る。

覚悟は出来ている。

――さあ、そのナイフを落とせ。

それでも、彼女には指一本触れさせない。

せめて、せめて俺が活着ている間だけは、必ず、だ。

「……なーんか、興奮めしちまったなあ」

俺の決意は数秒で無駄になった。

彼女の上に覆いかぶさっている俺のその上で、殺人鬼は予想外の行動を取った。

「うん、言葉が見つからないけれど、そんなラブラブぶりを見せつけられちゃったらなあ……気が変わった。ま、こんな夜もあって良いだろ」

やつはこっちが動きが見えないことを良いことに、俺の服でナイフの血を拭きとった。

「お前らは殺さないことにしてやるよ。なーに、特別扱いって訳じゃないぜ。ただの気まぐれだ。次に会った時は殺しちゃうかもしれないぜ」

……なんて自分勝手な。

「ありがとうございます！」

「……なんでお礼を言うんだよ」

俺の真下で、凄い至近距離で、彼女は満面の笑みを浮かべている。

……こいつはこういうやつだな。

「じゃあ、そろそろ行くか。お二人さん、もう無防備なまま夜は出歩かない方が良いぜ。まあ、ナイフを持って歩くっていうんなら、別だけれどな」

殺人鬼は皮肉っぽく笑って、夜の町の闇に消えていった。